こだわりのお茶を、より親しみやすく。
お茶の可能性に挑む二代目の思い

（この記事は『やくしん』2020 年 6 月号に記載された「経営に生きる、経営に活かす（第六回）」の記事を転載しております。役職等は当時のものです。）

お茶の紫香園（しこうえん）代表取締役　**佐藤陽子**さん

新潟県阿賀野市にある、お茶の紫香園は、創業から七十年を超えるお茶屋。
茶葉を独自にブレンドした、香り高く味のよいお茶は由緒ある賞を獲得するなど高い評価を得ている。
お茶に込めた思いを、お茶の紫香園の二代目が語ってくれた。

お客様の喜びは父の喜び

創業七十余年の「お茶の紫香園」は、新潟県阿賀野市を拠点として新潟市や五泉市などに八店舗を運営し、厳選した茶葉を独自にブレンドした煎茶と、その他にほうじ茶、健康茶などのお茶の製造販売を行っている。一番人気は、モンドセレクション金賞、国内品評会での受賞茶の煎茶「越後路」。直営店で年間四万本の売れ筋茶は、新潟県のみならず全国からの注文が入る。1972 年、佐藤陽子さんは京都にある短期大学の卒業後、東京の証券会社への就職が決まっていた。

一方そのころ、お茶の紫香園では大番頭の営業担当者が独立のため退社することとなり、当時社長だった父が盛大に送別会を催した。ところが退社した元社員は、その翌日から残った営業社員２名を引き連れて紫香園の

九州から自社に届いた茶葉の状態に合わせ、
ブレンドする茶葉の量を調整する。

お得意先の営業に走り始めた。するとあちこちの顧客から紫香園に連絡が入り、状況が一変した。父は長年患っていた神経痛の足の痛みも忘れるほど、すぐに得意先に訪問する準備をした。佐藤さんは就職することを急遽やめ、父の運転手役として訪ねたことのない町や村の得意先に車を走らせた。一軒一軒、ていねいに事情を説明してまわり見事なセールストークで、父は憤慨していたお得意先を次々と笑顔にさせ、耳を傾けてくれるようになった人たちは通常の数倍の商品を購入する形で応援をしてくれた。佐藤さんは、父が真摯に仕事に取り組む姿勢を間近に見ながら、試練に対して「お客様をただ喜ばせたい」という一心で乗り越えたと感じた。困難のたびに商売を盤石にしていく父の姿を見ながら、商売のイロハを学ぶとともに佐藤さんはこれまで以上に父に対して尊敬や感謝の念を抱くようになった。

その後、佐藤さんは一度京都の短期大学に戻ったあと、1984 年に紫香園に入社した。営業部や企画マネージャーを経て、1987 年に父が新たに開店したギフト店の店長を任された。その間に父は体調を崩し、入院や自宅での介護が必要となり、佐藤さんは五年間仕事と両立させながらの生活が続いた。そんな中、いつでも父はよく笑い、「みんな仲良く」を言いながら家族を和ませてくれた。日々、父と触れ合う中で父の生き方や仕事への思いが佐藤さんに伝わった。

手間をかけたお茶で、生活に彩りを

2017 年 1 月、二代目の社長に就任した直後の 4 月に父が亡くなった。「私が社長になったことで、最初は社員にも戸惑いがあったと思う」と振り返る。勤続年数の長い社員たちとの小さな溝を勝手に感じて孤独感に苛まれたり、長い間、父が無借金の黒字経営をしていたものの、実質上、数年前から社長不在で赤字転落も見える状況でもあった。

元来、明るく楽観的な性格だったという佐藤さんだが、眠れぬ日もあった。そんな時「佼成会の教え、お役で学んだことが生かされた」という。佐藤さんは教会女子部長、教会青年部長、支部長、教会婦人部長などを歴任。一人ひとりに学ぶ心で出会うとその人の素晴らしい個性や魅力に気づき、良好な関係を築くとともに、また新たな人の縁につながっていくということを学んだ。「社員の行動や言動に一喜一憂して自分の思いどおりにしようとするのではなく、一人ひとりに感謝をして認めていくことで相手の素晴らしさに気づき、結果として熱意をもって仕事に取り組んでもらえるようになりました」。問題が起きると、「父は、こんな時どう考えるだろう？」と自問し、逆境に強かっ

た父の思いを受け継いでいると自らを鼓舞しながら、日々奮闘している。「すべては仏さまが高めてくださるお慈悲と受け止める」と唱えると勇気が湧いてくると佐藤さんはいう。

お茶の業界は低調が続いている。従来は急須でお茶を飲むのが一般的だったが、ペットボトルなどの普及で手軽に飲めるようになり、次第に若い世代のお茶離れが進んでいる。そうした状況下でもお茶の紫香園が長年愛される理由は、こだわりの茶葉にある。そのお茶選びは、現在、専務を務める弟の克己さんが一手に引き受けている。克己さんは、十数年前にもっと美味しいお茶を提供したいと４年の歳月をかけ全国各地の優良産地を回り、最後に巡り合ったのが全国収量３パーセント未満の希少品種の茶葉だった。農林水産省「茶をめぐる情勢」（令和２年３月発行）によると、日本市場に出回る七割が「やぶきた」品種だが、九州、鹿児島県などには、年に数パーセントしか採れない希少な品種が豊富。特に旨味と甘みが魅力だ。そんな瑞々しい希少品種のお茶に感動した克己さんは、販売する煎茶すべてを数種類の希少品種で独自にブレンドしてつくりあげる。手間をかけているのは、「ただひたすらおいしいお茶を提供したい。少しでもお客様の生活に笑顔と安らぎを」と願っているからだ。

煎茶「越後路」をはじめ、気品あるパッケージで贈答品としても人気。

お茶がより生活に身近になっていくように

数年前、専務の克己さんに若い世代もお茶を楽しめるようにとティーバッグの製作を依頼した。当初は、急須で手間をかけていただくからこそお茶はおいしいと思っていたようだが、佐藤さんの願いが届き、克己さんが本当においしいと喜ばれるティーバッグづくりに挑戦し、試作づくりをするようになった。その結果、旨味や甘みのある見た目の色も美しい、ティーバッグが生まれた。お茶の紫香園のティーバッグは、お湯の中にしばらく付け何度か振るだけで濃厚なお茶ができる。カップであれば二から三杯分は飲むことができ、深みのある味わいを楽しめる。今後はこれまで以上に個性あるおいしいお茶をつくり出そうと、克己さんも試作を繰り返している。

2019 年には、紫香園のお茶を特殊加工して、ダイエット効果が高いとされる重合カテキンという成分が含まれるまろやかで飲みやすいお茶を発売し始めた。「健康と美容成分のお茶をさらに生かし、よりお茶に親しみを持ってもらえたら」と佐藤さん。現在、一日に必要なビタミンとカテキンが摂取できる粉末のお茶も試作中だ。

支教区長からおくられた金言。

佐藤さんは、かつて支教区長から配布された「いのちの尊さにめざめ、それぞれの命の花を咲かせよう」という標語の五項目をご宝前の前で唱える。「出会いを大事に学ぶ心でふれあおう」という言葉が自身の経営指針になっている。

また庭野日敬開祖、庭野日鑛会長からいただいた「今に感謝、今を生きる」という精神は、どこか父の生き方に通じていると佐藤さんは感じている。「ありがたいご縁をいただいている境涯に感謝し、私自身もお茶の紫香園の二代目としてまず自らの心を高め、何事にも感謝しながら、お客様や社員に喜ばれる取り組みをしていきたいと思います」と佐藤さんは話す。

時代の流れを読み解きながら、お茶の紫香園は、これからもおいしいお茶を届けていく。

●さとう　ようこ

新発田教会所属。新潟県阿賀野市生まれ。

池坊専修課芸術学部卒業後、1984 年に先代の父が経営していた株式会社お茶の紫香園に入社し、営業部や企画マネージャーを経て、同社のギフト店「ギフトしこーえん」の開店とともに取締役店長となる。2017 年、父の他界を機に、同社 2 代目代表取締役に就任。水墨画家として京都の画廊や新潟丸大デパートなどで数々の個展や展覧会を開催した実績もある。